



野球の物語が生まれるとき

鼎談

鈴木忠平
(ノンフィクション作家)

早見和真
(小説家)

クロマツテツロウ
(漫画家)

二〇二一年の刊行後、たちまちベストセラーとなり各ノンフィクション賞を総なめにした『嫌われた監督 落合博満は中日をどう変えたのか』の鈴木忠平氏、本屋大賞のノミネート作品に選ばれ球児の母親視点で書かれたこれまでにない野球小説として話題の『アルプス席の母』の早見和真氏、プロ野球のスカウトマンを物語の主軸にすえ、現代のドラフトの裏側を描く『ドラフトキング』や最先端の高校野球を描き出す『ペー革』などが人気を博すクロマツテツロウ氏。野球をテーマにしたノンフィクション、小説、漫画のトップランナーたちは何と向き合い、作品はどのように生まれているのか？ 三者三様、創作に込めた胸の内を語り合う。

それぞれの立場から考える
リアリティとの向き合い方

早見 クロマツさんの『ドラフトキング』（集英社）には僕の母校（桐蔭学園）が登場しますよね。グラウンドの風景とか。
クロマツ あ、そうですね。僕の『ペー革』（小学館）という漫画でも、校舎などの風景を参考にさせてもらっています。
早見 『ペー革』では、春の大会で「桐蔭」と

いう名前の学校が負けていましたね（笑）。鈴木さんの『嫌われた監督』（文春文庫）は、あるノンフィクションの賞で僕の『あの夏の正解』（新潮文庫）が同時にノミネートされていて、敗北した過去があるんですよ。
鈴木 そうでしたね。なんかすみません（笑）。
早見 『嫌われた監督』はあの時点ですでに山ほど賞を取っていたので、「もうここはいいだろう、俺にくれ！」と思っていたのですが（笑）。
クロマツ 早見さんのデビュー作『ひやくはち』（集英社文庫）は、二〇〇八年の作品ですよね。当時、僕はまったく仕事がない状態でくすぶっていて、サーフィンばかりやっていたんです。で、海のそばでポロポロの軽バンで車中泊している時に読んだのが『ひやくはち』でした。
早見 え、マジすか（笑）。
クロマツ その後、僕は二〇一三年に『野球部に花束を〜Knockin' On YAKYUBU's Door〜』（秋田書店）というコメディ漫画を連載することになるんですが、これは完全に『ひやくはち』にインスパイアされた作品でした。
早見 それは光栄です、ありがとうございます。
鈴木 僕は早見さんの作品でいうと、『アルプス席の母』（小学館）が興味深かったですね。以前勤めていた新聞社の新人記者の頃、甲子園で選

手のお母さんを捕まえてくる取材をよくやらさ
れていて、アルプス席で「〇〇選手のお母さん、いらっしやいますかー！」と大声で探して話を聞いていました。そういう実体験があるからこそ、この題材で一冊持つのだろうか？ という
純粹な疑問がまずあったんです。
早見 確かに僕も、書き始める前はけっこう不安でした。でも、いざ書き始めてみるとどんどんのっけてきて、「これはあと一〇冊くらい書けそうだな」となりました。
鈴木 なるほど（笑）。野球モノはたいいてい、ある一試合が物語のメインになって完結しますが、早見さんは甲子園の前後を描かれている。人生は物語のように閉じるわけではないという、このテーマ設定が絶妙で素晴らしいと思いました。
早見 おっしゃる通りで、このテーマなら物語としての終わりはないんですよ。人生が続ける、どこまでも続く。
鈴木 また、番記者時代にはスカウトの方が身近だったので、実は同じことを『ドラフトキング』にも感じていたんです。こうしてドラフトが作品のテーマになったことに驚きました。
クロマツ 僕の場合は漫画なので、もうすべて作り物ですけどね（笑）。フィクションと言えは聞こえはいいですけど、出鱈目なところも多分

にありますし。

早見 でもきつと、野球の現場にいる人が『ドラフトキング』を読んでも、「こんなことあり得ない」とは思わないですよ。ちゃんとリアリティが担保されているように見えます。
クロマツ そう言っていたらホッとしますけど、漫画として楽しんでもらうには、リアルにあまりとらわれすぎないようにしなければ、とも思っています。
早見 リアリティよりも、面白く読めることのほうが重要ということですね。ちなみに、主人公のスカウトマン、郷原眼力（元ネタになっているモデルはいるんですか？）
クロマツ いえ、本物のスカウトの方には何度も話を聞いていますが、特定の人はいないです。ただ、これだけ選手がいると、實在の誰かのケースと期せずして被ってしまうことがあって、僕のほうがびっくりすることはありますね。

早見 そういうことってありますよね。僕も『ザ・ロイヤルファミリー』（新潮文庫）という作品で、とくにモデルなど想定せずに主人公格の馬主を書いたのですが、何人もの方に「これってあの人でしょ」と言われました。みなさんに申し訳なく思ったことがあります。
鈴木 でもそれは、やはりリアリティがあれば